

異世代コミュニケーションに関する社会調査学習 ：研究会活動における学生役割についての認識と期待

金恵媛* 木村有希** 小中彩乃** 瀧本愛彩** 藤重朋子** 久村紀恵***¹

Key Word: 異世代コミュニケーション 社会調査学習 役割認識と期待

1. はじめに

本学の国際文化学科3年生が受講する「専門演習Ⅰ・Ⅱ」の到達目標は、「各自が選んだ専門分野において国際文化に関する知識とスキルを高めるなかで、国際的な行動力を養成」することにある。授業においては、「国際文化の領域における課題を発見し、分析して掘り下げ」ることを通して、「異文化の理解や寛容、適応、交流、共生、協働、人や地域の国際化等に向けて貢献する力を身につけ」ていく(授業概要)。学生の自主的参加によって運営される少人数制の演習科目であり、学生は、具体的な学習目標をもって授業に取り組むことが求められる。その学習目標の一つに、「自主学習のテーマを設定し、資料収集や読解、分析や発表、討論等ができる」が設定されている。

本研究の目的はつぎの3つに集約できる。1つに、上述の学習目標を達成するためのひとつの試みとして、本稿の共著者である3年生が質問紙調査(郵送、面接)の実施、分析を行うことである。これは「基礎演習Ⅱ」(2年後期科目)で実施したインタビュー調査の学習経験を踏まえた学習として位置づけられる。2つには、韓国社会論研究室の3年生が参画している地域住民との交流活動「やまぐち韓国研究会」での学生役割について検討することである。当活動は、上述の「異文化理解」や「人や地域の国際化等に向けて貢献する力を身につける」ための課外活動として運営しているものである。3つには、異世代コミュニケーションについての考察である。以上の問題関心から、調査対象及び調査テーマを、「やまぐち韓国研究会」会員(一般会員や卒業生、学生会員)、「異世代コミュニケーションにおける学生役割についての認識と期待」に設定した。これによって、専門的な社会調査教育を受けていない学生が調

査トラブルに陥るリスクを低減できるとともに、前述の異世代コミュニケーション力の実践的な補強を図ることが期待できる。同じ理由から、研究会の事務局を担当している久村氏に共著者としての参加をお願いした次第である。

2. 「やまぐち韓国研究会」における学生活動

「やまぐち韓国研究会」(以下、研究会)は、「平成17年度やまぐち桜の森カレッジ：国際・文化コース」を終えた受講者が作った「桜とムグンファの会」が前身である。十数名の地域住民が韓国のことについて学ぶ、異文化自主学習グループであった。ほぼ毎月開催の、座学中心の学習会を2006～07年度の2年間にわたって続けてきたが、原則として地域住民のみが参加する学習会であった。韓国社会論研究室(以下、ゼミ)の学生や韓国からの留学生はゲストスピーカーとして参加した。

このような状況に変化がみられたのは、2007年秋にゼミ生が企画した韓国スタディツアーに研究会員が同行したことからである。さらに翌2008年2月には、ゼミ生と研究会員との協働による『「桜とムグンファの会」と山口県立大学生による活動報告会」を地域に公開開催することができた。この共催は、これまでに経験できなかった「人の輪の広がり」や「経験豊富な先輩方から学ぶ」ことのすばらしさを実感できる機会となった(金ほか、2008:79)。結果的に、2008年度より、会の名称を「やまぐち韓国研究会」と改め、ゼミ生と研究会員との交流を日常的なレベルに押し上げるまでにいった。

学生の参画により、3年生と事務局(地域住民と卒業生による構成)がそれぞれのグループの窓口となり、顧問である教員が両者のパイプ役として全体を総括するという3者協働モデルが機能するようになった。学生会員の通常的な参加が可能になったこ

とから、定例会の準備及び運営の体系化を図るようになった。年間を通しての研究会全体のテーマ学習、個別発表、そして「プチ韓国語講座」を毎回の基本プログラムとして体系化し、年中行事として専門演習・卒業演習の中間報告会の開催、卒論発表、弁論大会のプレ発表など、多様なプログラム展開が可能になった。従来、ゼミと研究会がそれぞれ作成していた年間活動報告書も『金ゼミ・やまぐち韓国研究会活動報告集』として一本化した。このことにより、学生も一般会員も、編集から製本までの全作業過程において円滑なチームワーク、異世代コミュニケーションを体験できるようになった。

2012年、ゼミ生が学生会員として参加するようになってから5年目に当たる節目の年であるが、卒業生の参加が定着するようになったことも注目しておきたい。卒業生にとって戻れる場所、好きなとき、ともに学べる空間ができたことは大きな意味をもつようだ。彼・彼女らに先輩役割を意識させてくれる後輩とのつながりや、自身の成長を見守ってくれた一般会員が迎え入れてくれるアットホームな環境が作り出す心地よさからであろう（金ほか、各年度版）。これは先輩の背中を追う学生会員や地域の教育力を担う一般会員にとっても同様の意味をもつ相乗関係といえよう。

3. 事前学習：「基礎演習Ⅱ」でのインタビュー調査

従来、社会調査学習の目的は「社会学の研究を遂行するために必要」な学問的方法の習得に重きがおかれていた。ところが近年「社会に内在し、制度や政治や経済を形成したり動かしている」社会の仕組みを読み解くスキルが強調され（盛山、2008:64）、その習得が学習目的となることが少なくないが、本調査学習の意図も同じである。

共著者の3年生は、本調査の前段階として「基礎演習Ⅱ」（2年後期）で実施した「壮年層の生きがい」に関するインタビュー調査を経験している。きっかけとなったのは、「おばさんに生きがいはないでしょう？」というある学生の言葉であった。「基礎演習Ⅱ」では、アカデミックスキルの向上と、1年後の就職活動の開始に向けて自分の「いま、ここ」を点検する作業を行った。手始めに、現在を基点とする前後の2年、すなわち大学入学からの約2年間を振り返る、そして卒業までの2年間についての計画を立てることで近い将来像をデザインする作業を行った。

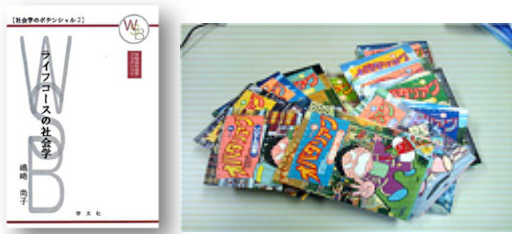
さらにその先の中期目標時点である30歳頃の自分のありたい姿の設定と、20歳からの10年間に対するスケジュールを考えていった。受講生の全員が授業の後半の1月に成人式を迎える状況を念頭に置きながら、さらに通過儀礼の本来の意味を意識しながらどのような大人になりたいかを話し合うなかで、前記の問いが発せられたのである。ここで問われるのは発言内容に対する正否ではないはずだ。異なる世界、人に対する想像力の乏しさや、ある種のステレオタイプを受け止める際に求められる批判的思考の有無ではなからうか。

表1 「基礎演習Ⅱ」の授業概要

実施回/月/日	授業内容
1回 10/4	なりたい大人像、大学生活についてマインドマップの作成
2回 10/18	各自が作ったマインドマップを発表
3回 11/1	否定的、固定観念の強い「おじさんおばさんイメージ」について議論
4回 11/8	第3回の協議事項を発表し、調査テーマを「中高年の生きがいは？」に決定
5回 11/15	調査方法等（質問内容、調査日程など）について議論
6回 11/22	『ライフコースの社会学』（以下、テキスト）（第7章）の発表；調査方法の協議
7回 11/29	質的調査・量的調査の学習、先行研究の発表；テキスト（第1章）発表
8回 12/6	テキスト（第2・3章）の発表
9回 12/13	学習生活のPDCAサイクルの発表・評価
10回 12/20	インタビューガイド（質問項目）案に関する話し合い；テキスト第4・5章発表
11回 12/27	インタビュー調査の事前チェック（質問項目・調査日時・調査対象）；テープ起こしについての学習；『オバタリアン』（堀田：1988）解説課題の分担（全13巻）
12回 1/10	調査結果、テープ起こしについての確認；成人式と成人の意気込みについての発表
13回 1/17	インタビュー対象者に対するライフストーリーの作成と授業内公開発表；未来マップの作成・お礼状作成案について協議
14回 1/24	ライフストーリーとお礼状の最終チェック；各自の未来マップの発表；「未来予創図」の公開発表の練習（韓国語コース新年会でプレ発表練習）
15回 1/31	基礎演習全体発表会、「未来予創図」プレゼン
16回 2/10	報告書完成、お礼状送付；インタビュー資料の消去と破棄；ポートフォリオ提出

資料：鯉坂ほか編（2012.3：3）より作成。

そこでちょっと考えてみたい。単身世帯、核家族世帯が過半数を占める今日において、おばさん、つまり壮年層以上の女性の生活実態や内面世界は、大学生にとって未知なる世界といっても過言ではな



かろう。母親の生き方を一人の女性のそれとして捉えなおすことはなおさら困難かもしれない。異なる世界や他者の状況についての想像力はどのようにして育まれるのだろうか。現在の認識及び認知方法の是非について問うベーシックな方法は、事例の蓄積による仮説の生成と検証にほかならない。そこでまず、ライフコースの多様性やおばさんに関する文献を輪読し（嶋崎2008、堀田1988）、先行調査研究について検討したうえで、当事者に話を聞いてみるインタビュー調査の方法を選択した。調査対象としては、意図しない欠礼があっても理解してもらえる親族や隣人の1～2人とし、調査後、授業内での発表と討論を経て、言語コミュニケーション系2年生の前で公開発表を行った。調査報告書『未来予創図～あなたの生き方がわたしの未来へ』（全55頁）には、インタビュー調査の事前準備や話を聞くことの大変さ、「おばさんには生きがいがないのでは」とした仮説の検証、調査を通して学んだこと、そしてそのすべてのことが自らの将来設計にどのような影響を与える経験であったかが詳述されている。課題の設定、調査の必要性の検討、調査の設計と実施、調査結果の分析、成果の還元など一連の過程をたどるなか、相手への配慮や聴く力、質問力、発信力などあらゆる領域において自身の成長を実感できたようである。さらに、多様な立場、多様な生きがいの事例から物事を多面的に捉えることの重要性について言及している学生が多かった。

本研究にはこの「基礎演習Ⅱ」の受講生4人が共著者として参加している。自身が参画している異世代交流活動について質問紙調査を行うという方法は、異世代コミュニケーションに対する本人の主観的評価を他者の視角をもって検証することであり、ふり返しとして極めて有効であると考えられる。さらに「基礎演習Ⅱ」での学びがどのように活用できたか、自身の肌感覚として確認していくことも、次のステップへつないでいく資源として重要な働きをするであろう。

4. 調査の概要

(1) 調査の目的とテーマ選定

本調査は、研究会での異世代コミュニケーションに関する考察であり、つぎの2つの目的を持つ。ひとつは、「専門演習Ⅱ」の学習目標である「テーマを設定し、資料収集や読解、分析や発表、討論等ができる」力を身につけること、いまひとつは、異世代コミュニケーションにおける学生役割についての認識と期待を多面的に捉え、今後の活動に反映していくことである。

アカデミックスキルの向上を目指すうえで、学習者にとってより興味を持てる、意味のある調査テーマを設定することは重要である。その点、学習者の課外活動である「やまぐち韓国研究会」に着目し、なかでも「学生役割についての認識と期待」にフォーカスを当てることにした。研究会活動における学生の役割や異世代コミュニケーションについてありのままの状況を把握し、記述する「記述的（課題探索的）調査」であり²、本調査の結果を持って今後の課題を設定、発展的な検討を試みることになる。

(2) 調査の方法と手順

① 調査設計：対象者の選定と質問紙作成

本調査は、質問紙を用いた「やまぐち韓国研究会」における学生活動に関する調査である。調査対象者は、研究会に参加している一般会員15名、学生時の活動経験者（卒業生）のうち現在連絡の取れる者13名、学生会員10名の計38名であり、後述のように研究参加同意を得ている。調査項目は、フェイスシート、本人の異文化・異世代交流活動に関する2項目、研究会参加状況に関する4項目（参加のきっかけ、頻度、目的、会場と自宅の距離など）、研究会の活動内容に関する2項目（関心のあるプログラム、改善点）、自身の参加態度等に関する2項目（参加の心がけ、参加による変化）、学生との交流に関する3項目（相互作用、希望する交流活動）である³。分析方法としては、記述統計及びテキスト分析（自由回答）を行った。

② 調査票の配布と回収

調査票の配布と回収は12月に実施し、一般会員と卒業生については原則郵送法を用いた。自宅に依頼文と調査票、研究参加同意書及び返信用封筒を郵送



注：打合せ、プリテスト場面（左）と面接調査場面（右）

し、回収した。学生には質問紙を直接渡して、記入したものを後日回収する方法をとった。調査票への自記が困難な場合、あるいは本学近隣に在住する対象者に関しては調査員が調査対象者宅を訪問し、調査員が質問文を読み上げ、対象者が口頭で回答したものを調査員が記入する方法を用いた。一般会員15名、卒業生13名、学生10名に調査を依頼し、回収できたものは一般会員15名（100%）、卒業生11名（約85%）、学生10名（100%）である。

③ 無効回答

質問項目のうち、調査項目Ⅱ-7「学生と交流して良かった点は何ですか？」とⅡ-8「一般会員との交流を通して学生はどのような影響を受けていると思いますか？」において複数回答に対する指示が不明確であった。回答状況を確認した結果、卒業生、学生では回答形態が同一ではなかったので無効回答とした。一方、一般会員では15名中14名分を有効回答として取り扱うことにした。対象者の協力によって得られた貴重な意見を活用できなくなったことについての深い反省と、この失敗から得た教訓を卒論などにつないでいく学習効果を期待する次第である。

（3）倫理的配慮

「社会調査とはそれ自体が社会のなかで行われる社会的行為」⁴であり、関係者のみならず社会に何らかの影響を及ぼしうることに自覚的であればならない。共著者の3年生は、日本社会学会が作成した倫理綱領を輪読し、議論を行い（「基礎演習Ⅱ」、「専門演習Ⅰ」）、本調査に臨むにあたって、調査対象者に研究の趣旨と個人情報保護のための対応等について説明ができるように努めた。

調査対象者には、本研究の趣旨および内容の説明を文書（一部口頭と文書並行）で行い、研究への参加は自由意志で決定され、途中でとりやめても、同意しない場合にも、不利益を被らないこと、さらに、調査内容は教育研究の目的以外には使用しないこと、

そして調査データは個人の同定ができないように厳正に管理し、分析、公表することを説明した。対象者の同意が得られた場合に署名をしてもらい調査を実施した。なお、本調査は山口県立大学生命倫理委員会の承認を得た。

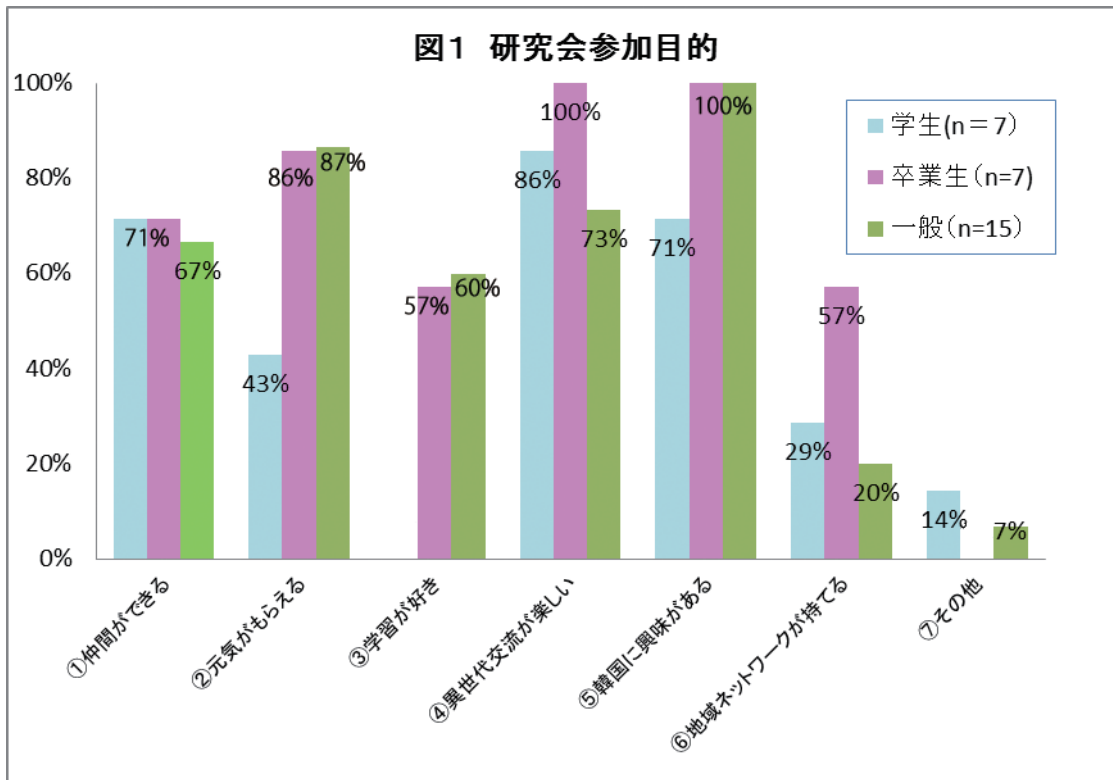
5. 調査結果

（1）対象者の基本属性と参加状況

分析対象者は、男性が5名、女性が31名である。会員の属性別にみると、学生が10名、卒業生が11名、一般会員が15名であった。年齢は、10代2名、20代19名、30代1名、40代1名、50代5名、60代2名、70代5名、80代1名と、学生と卒業生が集中している20歳代が相対的に多い。参加状況をみると、ほとんどの人が自宅から30分程度かかって（20名）、「ほぼ毎回」（17名）、本人の運転する自家用車（17名）に乗って参加している。

研究会に参加する目的をみると（図1）、一般会員の場合、「韓国に興味がある」、「元気がもらえる」、「異世代交流が楽しい」、「仲間ができる」の順であり、延べ選択数をみると62個で一人が4個以上を選択している。一方の卒業生と学生は、延べ選択数が各33個、22個であり、一人当たり平均選択数では卒業生が約5個と高いのに対し、学生は3個にとどまっている⁵。上位選択項目をみると、一般会員同様韓国への関心や異世代交流が高い分布となっており、本研究会に期待される役割がよく表れている。学生と他の2グループとでは「学習が好き」、という項目への選択率の差異が目立つが、これは研究会以外の学習環境の有無や交流目的における差異を示唆しているように。

このような状況は研究会のプログラムに対する興味・関心にもよく表れている。興味・関心の高い順に3つまで選択する順位尺度について、第1位に3点、2位に2点、3位に1点と得点を付与してみると（図2）、韓国関連の学習についての支持がいずれのグループにおいても高く、つづいて会員同士の交流項目が並ぶ。会員種別でみると、一般会員は、韓国学習以外の分野としては、「（留）学生交流」と「韓国旅行報告」、そして「一般会員との交流」に関心が集中している。図1の参加目的とも合致する結果となっているが、学習面で見ると「プチ韓国語講座」や「発表すること」などの能動的な学習より、発表を聞く形態の、どちらかといえば受動的な学習



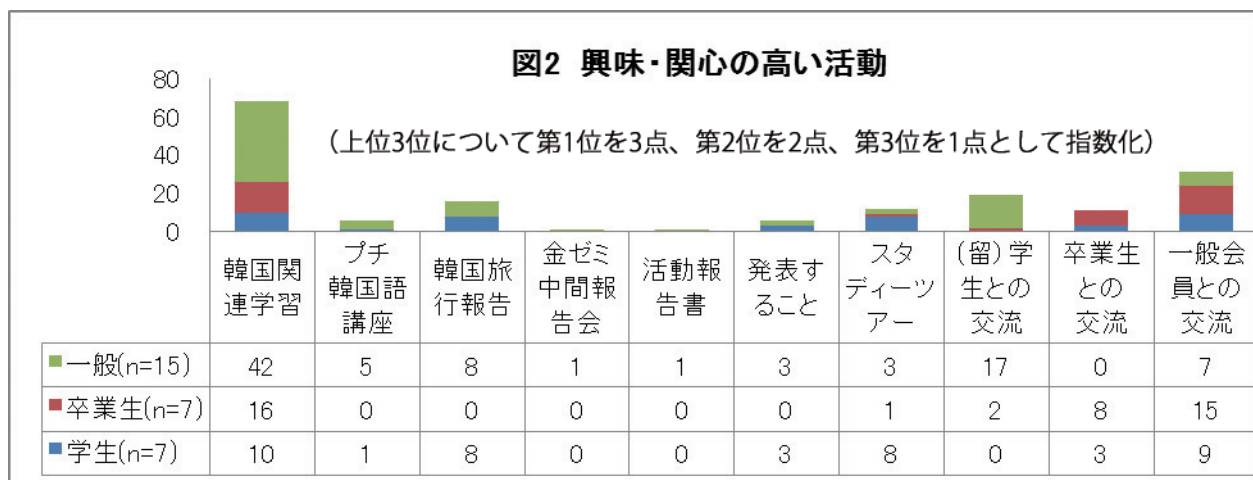
に重点が置かれている。人的交流に高い期待を寄せているものの、卒業生との交流に対する認識が薄いという結果は予想外であり、卒業生側の期待の高さとも対照的である。これは、卒業生の場合、卒業と同時に山口を離れる場合が多いこと、定期的に参加している卒業生については一般会員とする認識が濃厚であることが背景要因として考えられる。

卒業生の場合、一般会員や卒業生との交流、韓国関連学習への支持が高く表れた。研究会の特長である幅広い年齢層の人との異文化学習と交流に、そして学校を離れてからも同級生と定期的集まる機会、学習機会に重点をおいていることがわかる。一方学生の場合、異世代交流のほかに、通常の大学

授業では制限的な扱いになりやすい韓国旅行報告やスタディーツアー、多様な世代・立場からの意見交換が可能な韓国関連学習へと広がっている。

(2) 学生役割についての認識と期待

前述の「研究会への参加目的」や「興味・関心の高い活動」に関する調査結果からは、研究会活動における「学生の役割」、並びに「一般会員が学生に与える影響」に関して、相互が明確に意識している上に、その効用についても認知していることが確認できた。学生役割に対する具体的な期待という観点からみると、「(留)学生との交流」機会の増大を通して「元気がもらえる」「異世代交流が楽しい」効



果の増強を期待していることが観察できた（図1、図2）。関連項目として「学生と交流して良かった点」についてみると（表2）⁶、学習交流によって韓国に関する新しい情報を習得したり、異世代交流によって、「若者文化」に接したり、「学生気分を感じ」たり、そして「気持ちが若々しくな」ったりと文化や情緒面での「刺激を得られ」ている。そのことが楽しく元気がもらえるから休まず参加する、という好循環をもたらしている様子がうかがえる。

一方、「学生の成長ぶりがうかがえる」が高率を占めている点は、地域の教育力という面で興味深い。これを「一般会員との交流を通して学生が受けると思われる影響」の結果からみると、多様な「価値観」や「人生経験」、「礼儀・作法」など、学習の場での意見交換や何気ないコミュニケーションのなかでみえてくる要素である。年齢や社会的背景が異なることが相互の価値観や考え方の違いを認めやすくしているのではなからうか。さらにその状況が定期的、持続的に提供されるという研究会の特長が肯定的に作用した結果として見受けられる。

表2 一般会員が考える異世代交流の効果
(n=14、複数回答)

(1) 学生と交流して良かった点は何か	選択者数 (割合)
刺激を得られる	9名 (64%)
若者文化に触れる	11名 (79%)
韓国についての知識が増える	11名 (79%)
学生気分を味わえる	5名 (36%)
気持ちが若々しくなる	9名 (64%)
年齢差を意識しなくなった	5名 (36%)
学生の成長ぶりがうかがえる	10名 (71%)
その他	1名 (7%)

(2) 一般会員との交流を通して学生はどのような影響を受けていると思うか	選択者数 (割合)
刺激を得られる	3名 (21%)
年齢差を意識しなくなる	7名 (50%)
社会を学ぶ	9名 (64%)
礼儀・作法が身につく	6名 (43%)
年上の人と気軽に話せるようになる	8名 (57%)
多様な人生経験が学べる	9名 (64%)
多様な価値観に触れる	9名 (64%)
その他	2名 (14%)

そこで、研究会の良い点、改善点に関する自由記

述から学生役割、異世代交流認識をみておこう。次の表3をみると、学習交流と異世代交流において学生役割が強く認識されていることがうかがえる。いずれのグループにおいても「世代」、「交流」など多様性に関する表現が多用されている。特に、一般会員の場合は、「学生」や「若い」という表現や多様性についての詳細な記述が目立つ。

表3 「研究会の良い点」における交流、学生役割に関する表現（出現頻度別⁷）

学生	交流 (4) / つながり、世代 (3)、OG/先輩/卒業生、さまざま (2) / 色んな/異なる
卒業生	世代 (4) / 学生 (2) / 地域/会員/立場、異なる / 色々/幅広い、関わる/交流/接する/触れる/一緒 (2)
一般会員	世代 (4) / 年齢/学生 (8) / 卒業生/地域/若い (3)、話す (2)、和気藹々、交流 (5) / いっしょ/つながり/たて/仲間/互い、異なる (4) / いろいろな (2) / それぞれ/多彩/老若男女/違う/他人/幅広い/豊富

一方、研究会の改善点をみると、学生との異世代交流活動機会をより多く持ちたいという一般会員からの要望と、学生のより積極的な学習態度が望ましいという厳しい指摘が卒業生と一般会員の両方からあった。

表4 「研究会で心がけていること」に関する表現（出現頻度別）

学生	多い (2) / 色々/様々 (2)、はなす/かかわる/受け入れる/交流する (2)
卒業生	礼儀、色々/多い (2) 幅広い、伝える/聞く/話す (2) / 広げる
一般会員	学生/学生気分/若い/パワー / 若々しい、交流/和 (2) / 気配り (2) / 心配り/溶け込む/気付く、複眼/傾聴/質問/話す

表4は、「研究会に参加する上での心がけ」に関する自由記述を学生役割並びに異世代コミュニケーションの観点からまとめたものである。学生はなるべく多くの人と交流したいという積極性が前面に出ている一方、卒業生は、「学生、社会人両方の立場での参加経験を通して伝えられること」を強く意識している。一般会員の場合は、学習、交流全般への心がけを記述した人が多い。複眼的な、柔軟な姿勢で傾聴、質問するなかで自分の意見をしっかり表現することでの貢献を述べる人が少なくない。研究会

に臨む心がけを異世代交流の観点から見るために、「今後学生と取り組んでみたい活動」を挙げてもらった(表5)。結果を見ると研究会の改善点と重なる意見が多かった。学習に傾倒しすぎているという指摘が一般会員から多かったが、多様な形態の現地学習、研究交流会の共同企画ニーズとして現れている。学生活動を体験した卒業生が、学生と一般会員による異世代コラボレーションに注目していることと合わせて考えると、より身近で日常的なテーマを増やす必要がある。

表5 「学生と一緒に取り組みたい活動」に関する表現(出現頻度別)

学生	交流会/韓国料理会
卒業生	学生と一般会員と一緒に取り組みやすいテーマ/日本のなかの韓国探し/一般会員の自分史と学生の未来予想図を共同作業
一般会員	世代差が確認できる行事(お勧め映画/ドラマ、パーティーでのファッション等)、山口のなかの韓国・朝鮮探求(2)/野外研究会、交流会(3)/雑談会

つぎに、「研究会活動による自身の変化」の記述から異世代交流や学生役割についてみてみよう(表6)。学生は、卒業生や一般会員との交流のなかで、固定観念にとらわれることなく多面的な見方ができるようになったと自身の変化を評価している。同様の評価は、卒業生や一般会員の記述にもみられた。なかには、後輩の指導を意識したり、若い人とより年配の人の両方への理解と配慮ができるようになったという評価も見られた。主観的な評価とはいえ研究会活動を通して柔軟な発想、円滑な異世代コミュニケーションが図れるようになったという認識が参加者の間で共有できる点は、異世代交流活動の成果として注目に値しよう。

表6 「研究会に参加することで自分自身が変化したこと」

	コミュニケーション力
学生	視野が広がった;人見知りが減った;年配の方々へのイメージが変わった;元気をもらった;自分の意見が言えるようになった
卒業生	年齢差に関係なく、人と接することができるようになった(会社では10年選手と言われる);物事を様々な視点から捉える事ができるようになった;世代の異なる人にも緊張せず話せるようになった;人と関わることの大切さと楽しさを感じることができ、様々な人と明るく、積極的に話ができるようになった;後輩たちに伝えていくという役割を意識するようになった
一般会員	他のことは指示待ちだが、研究会の活動に関しては、自発的に動けるようになった;若い人の考えが知識になり、それを生かすようになった;若い方の思い、ご年配の思い両方の気持ちを少しくみ取れるようになった;周りが見れるようになった;自分の意見、考えをもつようになった;人前に立つのが嫌じゃなくなった

本稿では詳細な検討はしないが、卒業生が研究会活動から学んだことを述べた内容をみると、「社会に出たときに人と接す免疫ができた」、「異世代交流ができたので、常に周りを見るようになったし、人を思いやる気持ちがより持てるようになった」など、社会人になってから異世代交流の効用をより実感させられるという意見が多かった。

6. 考察

本稿では、異世代コミュニケーション、学生役割という観点から研究会活動についてみてきた。研究会の活動、会員を対象とする限定的な調査であることから、本調査結果を普遍化することは困難である。しかし、大学生と地域住民との異世代交流活動に対する一定の示唆を与えることは可能であろう。主観的評価ではあるが、異世代コミュニケーションの効用についてはいずれのグループでも確認でき、ともに肯定的に評価している。学生の果たす役割、一般会員が学生に与える影響についても双方が認知している。また、両方の役割を経験している卒業生の意見からは、後輩指導への役割認識や一般会員からより多くを学ぼうとする貪欲さが確認でき、研究会活動が異世代コミュニケーション力の向上もさることながら、より能動的な交流態度の育成に有効であったといえよう。韓国学習における学生や卒業生の役割について一般会員が高い満足度や期待を示し、学生と卒業生が一般会員から生きる姿勢や多様な経験

知を学んでいるという意見は、三者の交流関係が双方向的であることを意味していよう。さらに、期待する学生役割として、韓国知識の提供もさることながら、学習を離れての交流、世代差がもたらす斬新な刺激を楽しめる交流会や小旅行などへの要望もあり、多様性に富む異世代交流の機会を増やすことが課題として残る。一方卒業生は、学生に対して、一般会員よりも厳しい見方をしている。これは、学生の今後に対する期待が大きく、先輩として後輩を育てようとして取敢えて苦言を呈していると考えられる。卒業生が母校とのつながりを保持すること、大学がその支援に努めることの重要性はいくら強調してもしすぎることはないだろう。学生にとっても、近い将来における自分像を設計する上で、社会人になった親しい先輩と日常的に接することで、受ける影響は計り知れない。だからこそ、卒業生が参加しやすい環境作りは、研究会の今後のあり方を決める重要な取り組みとなるであろう。

つぎに、学生の社会調査学習について述べたい。本調査研究に関わるポートフォリオ資料として日録を作成してもらったところ、主にチームワーク力についての言及が多かった。役割の分担と統合、作業過程に関する状況認識の共有などである。社会調査については、個人情報保護やデータの管理、調査マナーといった知識や態度が身についたという自己評価が注目された。調査設計や分析の面では、質問紙におけるミスや結果分析が単純集計にとどまっていることに対する反省と学習指導の見直しを迫られる結果となった。今回、ドキュメント（報告書とブログ）分析と映像分析も試みられたものの、感想レベルにとどまり、本稿へのアウトプットには至らなかった。しかし、人を相手にする、諸リスクを意識しながらの一連の調査過程を経験したことから、卒業論文・報告に向けての一定の知識・態度を身につけることができたことは間違いないだろう。

<注>

¹ *山口県立大学国際文化学部教員、**同3年生、***「やまぐち韓国研究会」一般会員。

² 清田・佐藤（2010：93）。

³ 本稿では割愛するが、本調査では卒業生と学生を対象に、主な担当役割に関する2項目、活動経験の意味づけに関する2項目を尋ねている。

⁴ 多田（2011：80）。

⁵ 卒業生の場合、研究会への参加頻度の高い7名のみから回答が得られた。これは、研究会プログラムに対する興味・関心度調査においても同じである。

⁶ 表2で取り上げた質問項目については、本稿4-(2)-③で述べた理由から、卒業生、学生及び一般会員1名の回答は無効回答とした。

⁷ 形態素解析器「茶筌」を利用した。以下、同じ。

<参考資料>

鯨坂ほか編著（2012.3）『未来予創図～あなたの生き方がわたしの未来へ～』（韓国語コース2年『基礎演習Ⅱ』報告書）

清田勝彦・佐藤繁美（2010.9）「福岡県福智町における地域防災と地域防犯に関する調査研究—福岡県立大学の事例報告—」社会調査協会編『社会と調査』（No.5）、有斐閣、92-96頁

金恵媛ほか編著（2008）『「桜とムゲンファの会」と山口県立大学生による活動報告集～異文化・異世代交流の実践をとおして～』、82項

金恵媛ほか編著（2009）『異文化・異世代交流活動報告集2008 やまぐち韓国研究会』、86項

金恵媛ほか編著（2010）『2009 金ゼミ・やまぐち韓国研究会 活動報告書（vol.1）』、140項

金恵媛ほか編著（2011）『2010 金ゼミ・やまぐち韓国研究会 活動報告書（vol.2）』、122項

金恵媛ほか編著（2012）『2011金ゼミ・やまぐち韓国研究会 活動報告書（vol.3）』、130項

嶋崎尚子（2008）『ライフコースの社会学』学文社

多田光宏（2011.3）「東京の地方出身者を調査する—東洋大学社会学部社会学科イブニングコースでの調査実習—」社会調査協会編『社会と調査』（No.6）、有斐閣、77-80項

堀田かつひこ（1988）『オバタリアン』（全13巻）竹書房

盛山和夫（2010.4）「小特集 社会調査教育のあり方をめぐって：何のための社会調査教育か—社会学の観点から—」社会調査協会編『社会と調査』（No.4）、有斐閣、61-66項